

菩薩の応同に見出すものでなく、自ら六根清浄を得て神通力を自身の上に具現しようとする点にあったことがわかる。そしてその為、観音や普賢などの諸菩薩を実相原理の象徴であるとして把握しなおしたのであり、とくに四種三昧中の法華三昧や請観音經による非行非坐三昧には、その象徴の意味すなわち実相を探究することに主眼がおかれているのである。したがって専門品や勸発品において神通が説かれた目的は、智顛においては法華經の実相原理を顕彰するところにあったと考えねばならない。

かくして智顛は、神秘的超現実的な仏菩薩の神通応同を、現実主義的な実相原理、即ち円融三諦や十界互具などの原則のもとに統合し、ここに新しい法華經学が成立することになったのである。

人倫国家の悲劇性について

— イエナ前期ヘーゲルの政治思想 —

本学助教 訓 覇 嘩 雄

右のタイトルで、一八〇二年から三年にかけての『自然法論』と、手記『人倫の体系』におけるヘーゲルの思想をとりあげるが、初めにこの時期のかれのもった課題を概観しておきたい。

ヘーゲルの思考の型は、「分裂を克服して統一へ」であるが、いま分裂とは、小国家に分裂した祖国ドイツ、そこにおいて全体像を喪失し、個人的目的のみに関っている市民生活、普遍的道德法と個別的特殊に分裂している自己内心の生である。

ヘーゲルは、ベルンからフランクフルトの家庭教師時代、この分裂の起源をユダヤの「分離の思想」に見、これと対決するイエスの「愛による和解」の宗教にその解決を見いだそうとした。しかし生命の統一感情としての愛は、その圏外の問題（所有、権利、国家社会）が未済であるとき、また疎外の運命にひきわたされるものであった。

そこでヘーゲルは、この愛を損うものを自己の運命として引受け、『ドイツ憲法論』において、現実のドイツ国家を分析し、来るべきドイツ民族の国家には、その国家としての単一性の面から権力が、個別国民の多数性の面から自由が要求され、この単一性と多数性の統合されるところに、真の意味で分裂を癒す国家が成

立すると考えた。

この両者の融合を求めてヘーゲルは、『フイヒテとシェリングの哲学体系の差異』において、「最高の共同が最高の自由」という、いわゆる人倫の命題を提起する。この自由は、カント・フイヒテ的な、自然との対立関係で考えられる自由でなく、対立、分裂からの解放、一にして同一なる絶対者の回復としての自由である。そしてこの自由なる共同は、さらに具体的にどのような形態をとるのか、イエナ前期において、それを展開するのが、『人倫の体系』であり、その意味を考えるのが、『自然法論』である。

人倫体系は、多数の個人の個性性を失わずして、全体性を実現しようとするものであり、したがって三つの契機をもつ。すなわち絶対人倫、相対人倫、原始人倫であり、それぞれその働く基盤として、国家、市民社会、家族を対応させて考えてよい。そしてこれらはどの契機から出発しても他の両者が派出してくるといいうように、相互に含み含まれる統一をなさねばならぬ。

絶対人倫は、無私、最高の自由と美、神的なるもの等、きわめて宗教的な言葉で語られるように、どこまでも無差別に住する段階であり、その直観化、客観化したものは民族、その体現者は第一身分（貴族）である。この身分は差別から純化された身分として、経済的労働に関わらず、いかなる所有をも許されない。しかし「統治と勇氣という絶対無差別の労働」によって他の身分の所有を安全にし、絶対人倫のイデーを思い描けぬかれらに対して、絶対者を反映する像の役割を果す。

対立と差別を止揚した絶対人倫があるかぎり、同時に、止揚される差別と対立が、ある種の関係づけをもって存立している。つまり相対人倫の働く場は、経験的個別者である。しかも欲望、労働、享受、所有して、差別と対立にある個別者に、権利と法により、何らかの統一が、正義として形成されている段階である。この契機の体現者は市民であるが、この段階を説明するのに、ヘーゲルは、いわゆる労働の史的展開の手法を顕著に使っている。

個々人の自然的欲望、労働、享受は、個人と個人の相互否定の闘争を産むが、そのことは、自己の承認は他を否定することによってでなく、他の否定はかえって自己の否定を招くことを知らしめ、いわゆる承認の論理によって、自己否定的に相互依存の体系が形成される。そして個人の労働は分業、個々の欲望のためでなく余剰のための労働に、道具は機械に、占有は普遍的に承認された所有になり、契約、交換、貨幣が生じ、ある抽象的観念的な普遍性の支配の下に入る。この抽象的普遍者が法、正義であるが、これには常に個別者が対立しており、この抽象法が絶対視されると、統一は強制になる。だからここでの統一は観念的統一であって絶対的統一でない。

右の絶対人倫、相対人倫が未発展の形で包含されている単一性の契機が、自然的な原始人倫の段階であり、差別はあっても全体性が感情的に信頼され、身が託されている段階であって、その体現者が農民である。そしてまずこれら各身分の混淆を防ぎ、次に各身分がそれぞれの内部問題から自己崩壊せぬよう配慮するのが

「統治」の仕事である。

右の人倫体系の一瞥からも、民族、身分制度など、その発想の根拠について幾多の疑問が生ずる。なかでも、三身分が考えられていても、実質的には第一、第三身分と第二身分の間、つまり常に生命をなげうち、絶対否定の勇氣をもつ身分、そこに現された民族精神に信頼をよせている身分と、国事に無関心で、個々に欲望を自由に追求することが許されている身分の間には、大きな断絶が存すると思われる。そこでこの両者の間に、どのように「最高の共同」が可能なのかという問題に限定し、それを「人倫体系はどこに実現するのか」という問いとして考えたい。

というのは、この場合ヘーゲルの理論の底には、「フランス革命に対してどのような態度をとるか」という問題があつて、この革命の表向きの思想（自由、平等、世界政府、永遠平和）こそ、ヘーゲルのいう相対人倫の論理なのであり、かれはその抽象性、観念性の克服を、絶対人倫を立てることによって果そうとしたのだからである。

ヘーゲルのフランス革命に対する態度は、常に肯定と否定の二重性を含んでいる。ポリスの人倫が、ローマの形式的法社会の中で崩壊したことを繰返し歎くとき、ヘーゲルは同時に、国家への関心が根こそぎにされ、市民意識が私生活に局限され、実体的普遍性と個体の統一が失われることによって生ずる法の形式主義の極限を、フランス革命にみているのである。

しかしまた『人倫の体系』は、抽象法の体系が、歴史的必然性

をもつことを論証しているものであり、近代の自然法理論を、イギリス経済学と連関させて理解し、抽象法に社会的労働の歴史の所産という裏付けを与えようとしたのが、ヘーゲルの仕事だとも理解できる。それはフランス革命を、その表面のイデオロギーよりも、より深い根底において肯定することである。

ところで右の二つの態度は、そのいずれに偏しても、ヘーゲル理解としては不十分なものとなる。『自然法論』のヘーゲルは、かの社会的労働の所産である抽象法による体系を描き、次いでおよそ以下のようなことを述べる。絶対人倫はこのような体系に対して、否定的態度をとらねばならぬ。それは両者が端的に一でなければならぬということである。このことは、有機的自然が非有機的自然を完全に有機化せねばならぬという要求である。だがこの両者が混淆されて、根本的な区分がなされていないと、かの体系は必然的、普遍的に広がり、絶対人倫を破壊せずにはおかぬものである。だからこの要求にとって必要なことは、かの体系が意識的に採用され、その権利が認識され、高貴な身分からは排除されて、独自の身分として認容されることである。だがしかしこの事態は、絶対者が自ら演じている悲劇の上演にはかならないのである。

ヘーゲルはこの悲劇を明らかにするため、喜劇についても語る。喜劇とは、運命（生の分裂）がなく、真実の戦いのないものなのであり、それには古代の喜劇と近代の喜劇がある。古代の喜劇とは、すべてが絶対的な生の内部に帰し、対立は影法師にすぎないもの、近代の喜劇とは、非生命的なものに帰し、絶対者は影法師

にすぎないものである。前者は、ローマの個別化・分裂の世界を知らぬ古代ギリシヤの人倫であり、後者は、諸々の対立のもつれを、欺瞞的な絶対者—経験や理性によって、ものものしく理論づけられた自然法の体系—によって救済しようとするフランス革命のイデオロギーをいうのである。これに対して悲劇とは、「まさに絶対的なものが、自己を永遠に客体性のうちへ座み、このような形で、苦悩と死とに身を委ね、そして自らの灰の中から、晴れやかなものへと自己を高めることに他ならぬ」ものである。

これは、アイスキュロスの悲劇オレストイア三部作のうち、『慈悲の女神たち』の結末を念頭において、文学の形象を借りて述べているので、曖昧な点も目だつが、この悲劇性の構造は、まさにヘーゲルの承認アノエケネの論理、つまり自己意識と自己意識は、相互に他を廃棄することによって自己にかえるといふ、あの承認の論理にはかならない。かつて「否定によって自己自身をふたたび見いだす感情こそ愛である」といったヘーゲルが、いまその同じ論理を、最高の共同体の論理として適用しようとしているといえる。普遍と個別、権力と自由、国家と市民社会、公的生活と私的生活は、互いに他方のうちに自己の否定者を、しかもそれを自己自身とみることによって、分裂を癒される。

そして現実のヘーゲルは、このような承認の論理が可能になる国家形態を、古代ギリシヤやロベスピエールの政府にでなく、革命の止揚者としてのナポレオン帝国に見いだそうとしたのであろう。馬上の世界精神を、喜劇の見物人としてでなく、悲劇の観客として打ち眺めたヘーゲルの心は右のようなものだったと思われ

る。

しかし承認の成り立つ国家社会を、このように現実の国家形態に見ようとしたとき、かつて愛が愛自身のもつ疎外の運命にさらされたように、国家と革命も、ナポレオンの没落と共に、ここでまた歴史という、自己を疎外する運命に直面することになり、ヘーゲルはさらに意識的に歴史の中に承認の論理を探らねばならなくなるはずである。既にイエナ前期において、世界精神、絶対精神への通路が、このように開かれているわけである。

このようにみると、「ヘーゲルが革命を哲学の原理へ高めたのは、哲学のままに革命を克服する哲学を願っているためである」(ハーバーマス)という言葉は、かれの哲学の性格をよく表していると思われる。